

乳がん検診（施設）

動 向

本邦における乳がんは罹患率、死亡率とも増加傾向にあり、平成13年には乳がん死亡者数は9,720人であった。女性の乳がん死亡者数は悪性新生物による死亡者全体の8.1%を占めており、平成10年度以降、前年比3～5%ずつ増えている。

乳がん検診は平成10年に老健法から外れて一般財源化され、旧厚生省は平成12年4月にマンモグラフィ併用検診法のガイドラインを提示した。当協会では、それに先駆けて視触診検診法とマンモグラフィ併用による検診法の二方式を行ってきた。

平成13年度の動きとしては、横浜市の乳がん検診において、50歳以上の受診者に対し隔年でマンモグラフィ併用の乳がん検診を10月から実施している。乳がんによる死亡者のピークは50歳代という比較的若い年代であり、より効果的な乳がん検診システムとして期待される。

方法・対象

検診対象者は、視触診検診法では、各種団体の被保険者、その配偶者、さらに個人申し込み者を対象とするA群で、一方マンモグラフィ併用検診法では希望する個人、一部団体を対象のB群と、本年の9月で終了にした横浜市の試行による、市内在住の40歳、45歳、と50歳以上の女性を対象のC群、これに代わって10月以降の横浜市新規施策による、50歳以上の偶数年齢者（隔年）を対象とするD群に分けられる。なおマンモグラフィ併用検診のB、C群ではまず二方向のX線撮影（MLまたはMLOとCC）、D群では一方向の撮影（MLO）を行い、その画像を参考にしながら問診、視触診と、同時に自己検査法の啓蒙を行っている。後日、マンモグラフィ施行群は3人の医師と4人の放射線技師によりダブルチェックし、D群についてはさらに横浜市総合判定機関がチェックし、要精検者を決定している。

結果・考察

平成13年度の視触診検診法の受診者は12,053人で前年度より1,204人減少している。要精検者は15%で精検受診率は86.1%であり、発見乳癌は13例で発見率は0.11%である。初、再診の受診者数の比は1：2.5であるが、発見乳癌は各3例、10例で再診者の発見率は0.12%を占め、初診者よりも高率である。また50歳代が受診者数のピークであるが、発見乳癌もこの年代に多く、発見率は0.14%と高率である。

なお発見乳癌のうち早期癌は7例、53.8%である。

有自覚者の乳癌は6例であるが、そのうちの早期癌は僅か2例で、4例の進行癌のうち30歳の若年者が含まれている。また初診者の乳癌3例のうち、早期癌は

1例で、他の2例は腋窩のリンパ節腫大から検出されている潜在癌と前記の30歳の進行癌であり、外来へ受診すべき症例が多く見られる（表1）。

マンモグラフィ併用検診のB群受診者は266人で2例の乳癌が検出されており、発見率は0.75%で両者共に腫瘍は1cm大であるが、各1個のリンパ節転移を認めている（表2）。

横浜市主催のマンモグラフィ併用検診のうちのC群の受診者は1,324人で昨年度より219人増加している。要精検者は233人、17.6%で、発見乳癌は8例で0.6%と高率である。初、再診者数の比は1：3であるが、発見乳癌はそれぞれ3例、5例であり、発見率は0.86%、0.51%となる。50歳代に発見乳癌のピークがある。

なお早期癌は6例で75%と高率となっている。

有自覚受診者からの発見乳癌は4例で、そのうち早期癌は3例で、1例は初診者の進行癌である。一方無自覚者の発見乳癌は4例で、そのうちの3例は早期癌でいずれもマンモグラフィによる石灰化像から検出しており、マンモグラフィ検診の有用性を裏付けている。しかし、1例は明らかに腫瘍の触知可能な進行癌である（表3）。

次いで本年10月に発足した横浜市主催のD群については、当施設受診者は843人で、そのうちの要精検者は162人で、精検率19.2%であり、発見乳癌は2例で発見率0.23%である。1例は無自覚で受診、非触知乳癌でマンモグラフィによる石灰化像から検出され、1例は有自覚者の乳癌で、いずれも早期癌である（表4）。

次いで検診後の経過観察者は2,651人でそのうち、発見乳癌は7例である。37歳の1例を除き全例40歳代である。これら発見乳癌の診断過程において、5例はマンモグラムの石灰化像所見が、2例は腫瘍形成例で高濃度乳房（dense breast）のためマンモグラフィより触診、超音波検査所見が有用となっている（表5）。

ま と め

視触診検診の受診者数は企業団体の健康管理の一環としての受診が多く、従って若年者層が増加しており、これに反して、50歳以上ではマンモグラフィ検診の推奨により、減少傾向にある。一方、マンモグラフィ併用検診の受診者数の増加は顕著である。

発見乳癌のうち、非触知乳癌はマンモグラフィによる石灰化像から検出されているが、一方、腫瘍触知乳癌では、特にdense breastのためマンモグラフィより触診、超音波検査が優位となっている症例がある。

今年度の検診による発見乳癌は25例で、早期癌は15例、60%を占めているが、有自覚者の乳癌の12例のうち6例が進行癌で、また無自覚者の乳癌の4例は触知可能な進行癌であることは、より一層、乳癌についての啓蒙活動と自己検査法の指導が必要である。

関係の集計表は122～124頁に掲載